岡山県苫田郡鏡野町文化財調査報告

第 1 集

中島健爾所有

土　居　　徹

鏡 野 町 教 育 委 員 会

1 9 6 9

美作鏡野町土居妙見山古墳

土　居　　徹

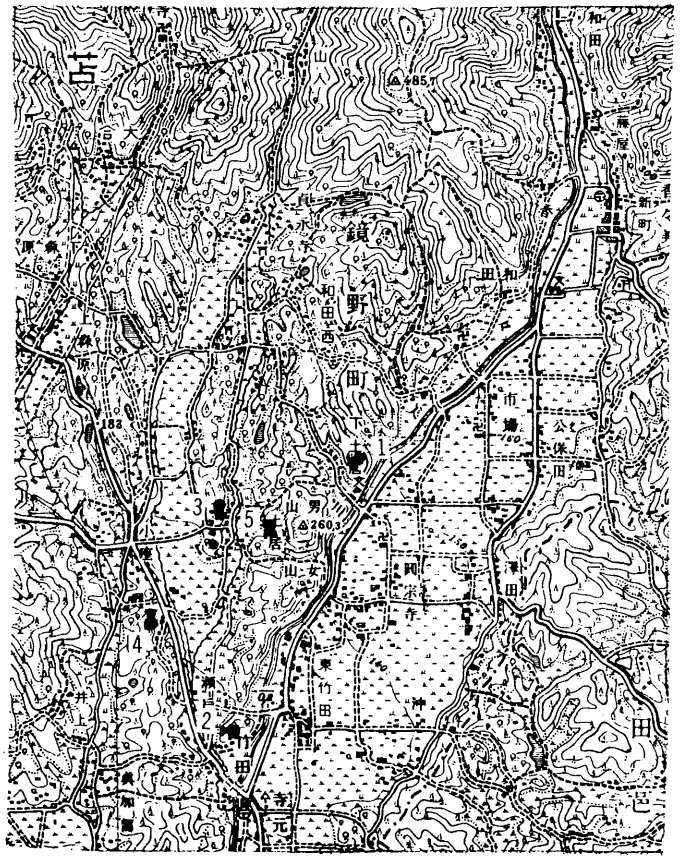
I

本報告は発掘調査報告ではなく，盗掘後の遺物調査・外形測量・破壊部の調査による報告にすぎない。にもかかわらず，本報告をまとめたのは，美作では4～5世紀の古墳の多さに比べて報告例が非常に少ないからである。

1957～1960年にかけて行なわれた鏡野町綜合調査(註1)によって，本古墳の存在は知られた。1966年8月に本古墳が盗掘されたことを聞き，散逸していた遺物を取り寄せ遺物の実測を行なった。1967年1月に今井堯氏と共に実地調査をし，遺物の確認をし，1968年9月に今井・土居が外形測量を行なった。研究者による発掘でないため，主体埋葬状態・遺物出土状態が充分に確かめられず，遺物の一部しか明らかでないという不備を伴なった報告である。

土居妙見山古墳は，岡山県苫田郡鏡野町土居に所在する。貞永寺・土居・小座・瀬戸・竹田の比較的広い谷水田中に突出する半独立丘陵頂に立地し，水田面との比高は30mで眺望は広い。この谷水田は南下して竹田で香々美・大野両盆地と合して，院庄に至り津山盆地となる。水系は，貞永寺の山人に発する山人川に属し，下流の竹田で香々美川に合わされる。（第1図）

この水系中の大形古墳を見ると全長43mの土居赤峪古墳(註2)・全長36mの竹田妙見山古墳(註3)・小座の狐塚古墳15m・横穴式石室を有する全長26mの土居天王山古墳(註4)と連なる。土居妙見山古墳はこの谷を支配する豪族の一系列の一つと考えられる。他に土居妙見山古墳の南，地溝状になってへだたった独立丘上に直径13.9m・高さ1.5mの古式の円墳があ



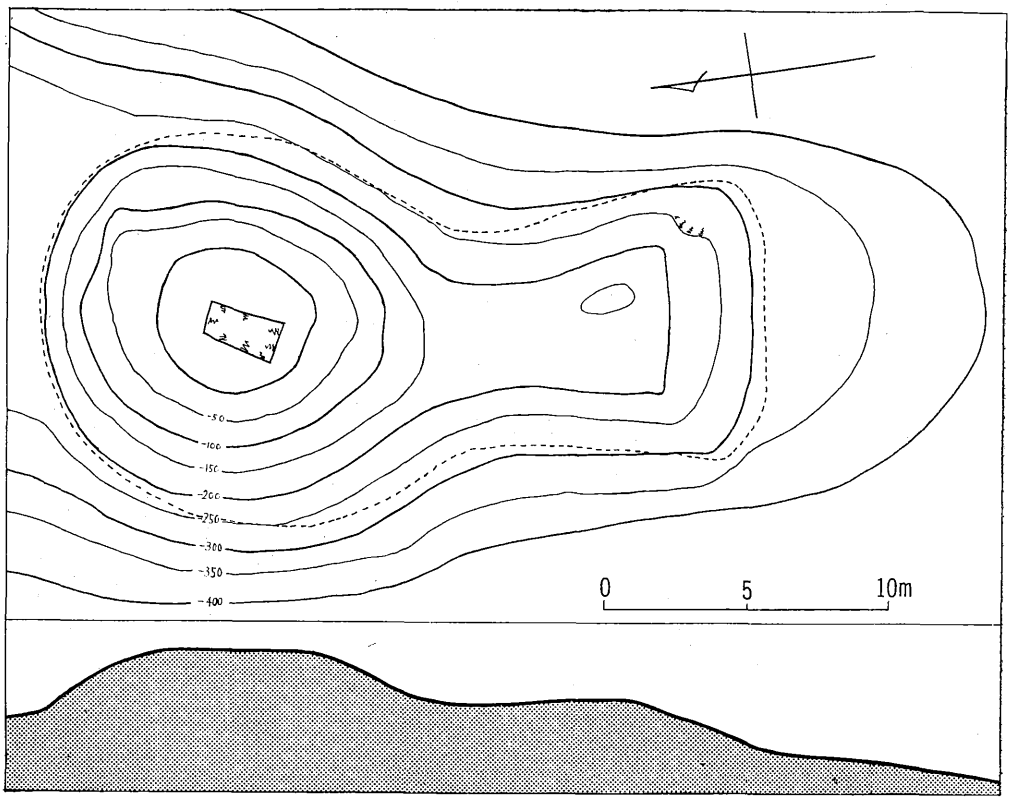
第1図　古墳分布図　　1.土居赤峪古墳　2.竹田妙見山古墳　3.土居妙見山古墳　4.小座狐塚古墳　5.土居天王山古墳

る。

II

土居妙見山古墳は，丘頂を削って築造した前方後円墳である。

全長25m，後円部径13.3m，後円部頂平坦部径が南北に 5.5m，東西に5 mで，やや楕円形をなしている。くびれ部の巾 7.5m，前方部端巾 9.8mである。高さは，後円部で 2.5m，くびれ部で 1.1m，前方部は 1.5mで，前方部頂と後円部頂との比高1 mであるが，下降する自然丘を利用したため後円部墳端より前方部墳端は1 m低くなっている。（第2図）



第2図　土居妙見山古墳実測図

主軸は，ほぼ南北に通っている。

外形は，後円部中央に盗掘壙がある以外はほぼ原状を残している。墳斜面には，児頭大から人頭大の河原石が密に葺かれている。埴輪は発見されていない。

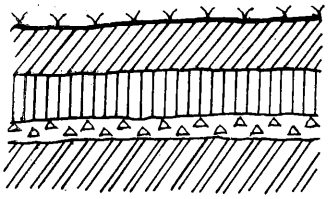
III

後円部中央に巾 1.5m長さ 3.7mの不整長方形の盗掘壙があり，その南の部分での所見は次の通りである。

頂表土に続いて，黒褐色土層，その下に茶褐色土層，更に下層にトッコを多く含んだ土層があり，粘土槨に至る。（第3図）

後円部の内部主体は，主軸に平行した粘土槨2である。この2つの粘土槨の東の1つをA主

体，西の１つをＢ主体と呼ぶことにする。



第３図　後円部盗掘壙にあらわれた断面図

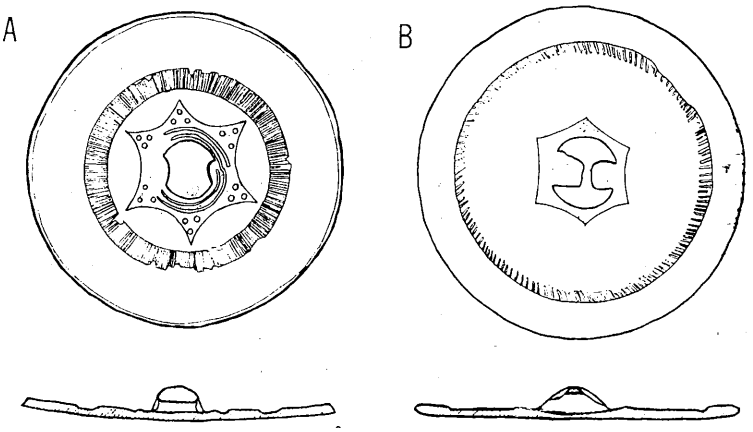
Ａ主体の粘土槨は，盗掘の際相当かく乱されていて，ほとんど原形をとどめないが粘土槨の両端はおさえることができた。粘土槨は墳頂より 147.5cm下にある。粘土槨南端の側壁巾約40cm，木棺巾約65cm，木棺長約 230cmである。

Ｂ主体は，Ａ主体同様粘土槨でほぼ平行し，Ａ主体とレベルも同様である。土層面にも違いを認めなかった。未発掘である。

Ⅳ

現存する遺物は，鏡２面，剣２本のみである。遺物出土状態の詳細は知り得ないが，後円部のＡ主体内からの出土であることは確かである。土師器については，主体直上墳頂の遺物の可能性もある。他に墳頂で見つけられたと思われる土師器片４があるのみである。

鏡Ａ（第４図）直径 8.4cmの内行六花文鏡で白銅質である。重量は77.4ｇ。鈕の径 1.5cm・高さ 6.5mmであるが，鈕座はない。その外側に２条の細い凸帯がめぐらされている。６つの花文の各頂点には，径 1.5mmの珠文３箇がほぼ正三角形状に置かれている。その外側に巾６mmの櫛歯文帯がある。全体に片方の文様が薄れている。又，櫛歯文帯のところで，鋳くずれが少し見られる。しかし，表面は大へんなめらかで手ざわりがよい。鏡面は中央から縁辺にかけて，ゆるい反りが認められる。厚さは最も厚い外縁で 2.5mm，最も薄い内区で 1.5mmである。仿製鏡ではないかと思われる。



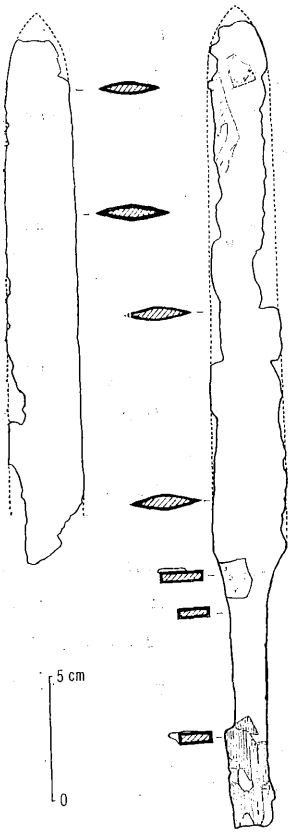
第４図　土居妙見山古墳出土鏡Ａ・Ｂ

0　5 cm

鏡Ｂ（第４図）直径 8.8cmの六花文鏡で白っぽく見える白銅質である。重量 97.2ｇ。鈕は径 1.9cm・高さ６mmで鈕座はない。鈕の穴が大きく鈕の上部が２mmの巾しかない。六花文は鏡Ａよりずっと小さく，花文の頂点に珠文が認められない。その外側，外縁に接してやや斜めに２～４mmの櫛歯文が鋳出されているが，片方ではほとんど消えかかっている。全体に磨滅がひどい。厚さは最も厚い外縁で３mm，最も薄い内区で２mmである。鏡Ａと比べて鈕や花文といい，櫛歯文といい粗雑であり，磨滅がひどい。これも亦，仿製鏡であろう。

剣　剣は２本であるが，聞きとりによると主体の両側に１本ずつあったという。

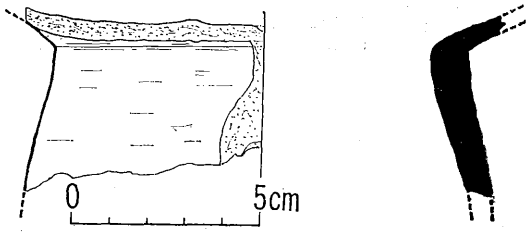
第５図右は，全長推計32.5cmで，身の長さ21.5cm・茎11cmである。身巾は 2.7cmであるが，全体に腐朽がはなはだしく計測結果は正確を期し難い。茎の部分に木質が付着しており，柄に



第5図　鉄剣

木が用いられたことを示す。又，身の切先部に近く布と思われるものが錆び付いている。身に接した茎の部分には金属片が付着している。第5図左は，腐朽破損がはなはだしく，身の断面が菱形をしていることから剣の身の一部分であると判断できるだけである。その他に鉄剣状鉄器2があったと言われている。

土師器　大形器台の脚部である。整形が入念なこと，外面に



第6図　土居妙見山古墳出土の土師器器台

丹が塗られている点に特徴がある。（第6図）

墳外遺物　古墳前方部端より10数m南の傾斜面から，小形器台・小形坩・高杯がでた。聞きとりによると，松の植林中深さ20～30cmの地表下から出たようである。これについての報告は次の機会にゆずる。

V

土居妙見山古墳は，出土品が小形仿製鏡・鉄剣・土師器の器台等であること，外形の特徴，内部主体が粘土槨を有すること等から5世紀代の古墳と言えると思う。(註5)

山人川流域を中心とする大野地区・小田東部の地区では，土居赤峪古墳・竹田妙見山古墳・土居妙見山古墳・狐塚古墳・土居天王山古墳といずれも前方後円墳であり，1つの系列をなすものと思われる。土居妙見山古墳の被葬者もこの一帯の支配者の1人であったと考えられる。

△この報告を作成するにあたり，津山市教育委員会の今井堯氏よりずいぶんと多くの教示や励ましの言葉を頂き，更に，岡山大学近藤義郎先生・美作考古学研究会より器材・研究書等の援助を与えてくださいましたことを記して謝意を表します。櫻井直氏には，測量遺物についてたいへんお世話になりました。

註

1）「鏡野町綜合調査報告書」苫田郡鏡野町　1961年

2）鏡野町学校教育研修所編「鏡野の歴史」鏡野町　1962年，「赤峪古墳発掘速報」1960年

3）全長36mの前方後円墳，盗掘にあっていて，主体は石棺を用いない式である。盗掘後の調査で，大形内行花文鏡片・細形管玉2・小玉27が出土した。

4）今井堯「美作国鏡野町土居天王山古墳」『鏡野町綜合調査報告書』鏡野町　1958年

5）今井堯氏の教示による。